

湯川武先生を悼む

長谷部 史彦

慶應義塾大学文学部教授

二〇一四年三月八日の朝、湯川武先生は遠く旅立ってゆかれた。その三か月後、先生が学界でのご活躍の中心舞台とされた早稲田大学イスラーム地域研究機構、日本中東学会、NIHUプログラム・イスラーム地域研究、そして、学び教えられた慶應義塾大学文学部東洋史学専攻が丸となって偲ぶ会を催した。まさに巨大な人的ネットワークの中心におられた先生であり、三田の広い会場でも人数制限に苦心し、結局は多くの「湯川ファン」に失礼することになってしまった。あれからもう半年以上経つが、先生の不在というこの世の現実が私には未だ十分に受け止められないところがある。

先生の圧倒的な存在感については多言を要すまい。接する幸運に恵まれた多くの人々にとつて、先生との弾む対話はしばしば生きる支えとなっていたに違いない。周知のように先生はスピーチの達人でもあったが、それは普段に雑談されるときに仕方と連続していて、力強く温かく、華やかだが自然に心へ染み込んできた。先生は学生に対して、「世界が小さい、小さい」と言われた。研究者、教育者、大学経営者、そして何よりも人間としての湯川武の世界は

まさしく壮大だった。私にはその全貌を見渡す力は勿論のこと無い。以下では、「都の西北」の学術誌であることは棚上げし、「陸の王者」の教え子の一人が感知した先生の一面について、極私的な思い出の雑文を記させていただく。

一九八〇年代初頭、大学に進んで間もなく日吉の「歴史」の講義で先生と出会い、衝撃を受けた。不惑を迎えられるところで、アーシュラーの哀悼行事について身振り手振りを交えて目を輝かせ詳説されたかと思ふと、私語を交わす学生たちが大教室を退場するまでマイク不要の大音量で怒鳴り続けられた。先生は愉快な遊びの名人だったが、不真面目な受講態度は許されなかった。パワフルで鮮烈な、経験したことのない授業だった。豪快な講義にもかかわらず精細な手書きの資料を何度も配られ、未知の論点が止めどなく溢れ出て、文化人類学でアフリカをなどと漠然と思っていた当時の私は、湯川版イスラーム史にすっかり魅了され、この道に足を踏み入れることになった。

そうして入った湯川ゼミの思い出は、先生が時に御身のベルトを外して手に巻きつけられるなどした芝の大衆割烹「つるの

屋」の伝説の夜宴、温泉合宿での「一杯一浴」など色々あるが、内房でのアラビア語合宿も忘れられない。当時先生は三田の言語文化研究所のアラビア語の講座も担当されていたが、夏休みに特訓の場を設けようと、「とにかく安いのにしよう」と言われてゴキブリの這う極限的な安民宿を手配された。同年の三沢伸生君を含む私たちは母音記号のある程度付いたアラビア語短文の解読に苦しんでいたが、その横で先生は畳に悠々と寝転び、ムスリム同胞団に関するアラビア語の本を辞書なしで読んでおられた。私たちの憧れは募った。そして、私が最終学年を迎える直前、一五世紀エジプトのマクリズイーの経済論、『ウンマの救済』を卒論で取り上げてはどうかという的を射たアドバイスを下さり、先生は日本大使館の専門調査員としてエジプトへと赴かれた。依存的学生はみな心細くなり、「愛弟子」の野元晋さんを担いでザマレクの御宅に押し掛けた。ニザーム（秩序）の無いカイロ市内の道路を移動中、「馬鹿野郎、寄ってくるな！」と叫びつつクラクションを長々と鳴らし、陽気にハンドルを操られる勇姿、そして「今日の野元係は誰だ？」と言われたときの笑顔が今でも目に浮かぶ。なお、糸の切れた凧となった私は、中世末期の碩学スューティーに関する幼稚な卒論を書き、修士課程に進んでようやく前述の『ウンマの救済』の重要性に気づき、向き合うことになった。今思えば、ゼミの多くの学生たちと同様、私も先生に頼りきっていた。先生は精力的に様々な研

究文献を購入されたが、次々と惜し気もなく分与されたので、膨大な蔵書の大部分が結局は依存的な教え子たちのものとなった。育てていただく過程で、私も貴重な書き込みのあるサハーウィーの伝記集など種々の史資料をかなり頂戴した。その後、就職して三田の山の教育現場でしばらく一緒に働くことになる幸運に恵まれた。もう先生に頼るまいと自らに言い聞かせて働いた。が、人助けが先生の最重要領域であるのをよいことに、二〇〇七年三月に御退任されるまでの一六年間、何かと愚痴を吐き、困るとご助力を仰いでしまった。

世紀の替わった頃、家族でひばりヶ丘に伺い、木々に囲まれた御宅の広い庭でパーベキューの御馳走をいただく機会があった。奥様も夏の陽光を受け、明るく笑っておられた。ピールが結構入っていると先生は、園児だった私の息子に「俺の腹をグウで思い切り殴れ」と言い出された。湯川ゼミ出身の妻や私にとって驚くような展開ではなかったが、息子は躊躇していた。腹筋を固めた先生は「手加減したな？」と繰り返され、子どもなりの強打を何発か受けとめるまで満足されなかった。私には、ある酒宴の帰路「もう一軒」という御誘いを無礼にも断り、渋谷駅で追いかけられ振り切ったことはあるが、幸か不幸か「格闘」は経験していない。「生意気だな」と言いつつも年齢差を度外視して対等な人格的交流や生身の交感を求める若々しい意欲を終生失われなかった。深い人間関係を避ける傾向の強まるこの列島社会で、本当に理想

の師であり続けられたと思う。

中世イスラーム史を主たる研究分野とされた先生は、私の学部時代、ゼミのテキストにラムトンの『中世イスラームの国家と政体』を選ばれるなど、ウラマーの社会史からイスラーム思想・国家論へと研究の軸足を移されつつあった。後に刊本となったマールデリーの『統治の諸規則』の訳を雑誌『イスラム世界』に連載されていたころである。日本におけるウラマー研究の先導者だった先生の初期の代表作にウドゥフウィーの地方伝記集を用いた論攷「中世上エジプトのウラマー共同体」がある。プリンスン大学時代に中世上エジプトのウラマーに関する博士論文を準備されていた先生にとって、フランスのアラブ史家ガルサンの中心都市クースを論じた七〇〇頁に及ぶ大著を刊行したのはシヨックだった、と伺ったことがある。「フランスの研究者は調べたことを何でも書くから困る」とこぼしておられたが、同感である。けれども、政治思想史研究への展開をそうした「災難」によるものとみるべきではない。先生は一神教とその思想に対する強い興味や該博な知識とともに、強権や暴力への批判精神を確かに保持されていたので、イスラームの政治思想への軸足移動は自然な成り行きであったように思われる。一段と総合的なウラマー研究を目指されたとも言えよう。社会史志向の私は素直にその後を追いかけることができなかったが、先生は都市社会、とりわけそのエリートの様態に強い関心を

持っておられた。ウラマーのみならずタージル（大商人）や中東都市の商業に関する先生の博識からも多くを学ばせていただいた。同級生のシヨシャンが来訪する恩師アシュトル（いずれも著名な中東経済學家）への畏怖から先生に空港への出迎えの同行を求め、その際にアシュトルから史料面の細かなアドバイスをもらった、といった留学時代の様々なエピソードも私には印象深かった。中世イスラームの協業契約の研究で知られるユドヴィッチがプリンスン時代先生の指導教授であり、一九七〇年代の米国で活性化した中東社会経済史の新潮流の内実を日本で最もよく御存じであった。

御著作の一覧については、先生の若い教え子たちがまとめた上記の偲ぶ会の配布冊子を参照されたい。先生が喜ばれるかどうかは疑わしいのだが、「書いたものは庭に穴を掘って埋めたい」とよく仰っていた。それは、学生の研究発表の弱点を即座に見抜く先生の批評眼と関わっている。ご自身の過去の作品にも、鋭い視線を向けられていたのだろう。卒論や修論の審査、院生の発表会などで幾度となく一緒にしたが、欠点や問題点をいつも見事に指摘され、自己の価値を高めるための批評ではなく、構成の組み換えや個別具体的な修正方法を親身になって指示されていた。先生の偉大さを特に強く感じたのは、こうした報告や論文に関する指導の場面においてであった。教員に成りたての頃、院生の発表会の後、「長谷部は言い過ぎだ。人の生きる基盤を

壊す言い方はよくない。」と珍しく真顔の先生に窘められ、ハッとしたことがある。先生は踏み込んだ交わりを一瞬で実現されたが、個々人の幸福と尊厳、延いては人類の平和共存をいつも熱く思い続けておられた。先生に依存してきた私たちにはそれだけに頼りないところがあるが、先生が理想

湯川武先生の思い出

——エジプト・スーダンでのエピソードを中心に——

栗田 禎子

千葉大学文学部教授

湯川武先生とは、「NIHUPログラム・イスラーム地域研究」の中の、先生が代表を務められていた研究グループ「イスラームの知と権威」(早稲田大学拠点)に加わらせて頂いたおかげで過去数年間にわたって一緒に仕事をさせて頂く機会があった。また特にこの研究グループの一環として私が始めた読書会『アラブ・イスラーム哲学における唯物論的諸傾向』(フサイン・ムルーワ著)に、先生も当初から熱心に出席して下さったので、読書会後の懇親会等でもたびたび同席させて頂くことができた。このように先生とのお付き合いはごく最近まで続いたのだが、ここでは約三〇年前、先生と初めて知り合った——それはエジプト・スーダンにおいてであった——頃の思い出を振り返ってみたい。

とされた差別や抑圧のない共生の世界の実現に向けて進まねばならない。重要なことは学問だけではないという当たり前のことをリアルに教えてくださるのが、私にとつての湯川先生である。先生のごことは、今でも本当は現在形で語りたい。

カイロの湯川先生

湯川先生に初めてお目にかかったのは一九八五年春、カイロにおいてである。当時先生は在エジプト日本大使館に専門調査員として赴任しておられ、修士課程を終えて日本から留学してきたばかりの私が大使館を訪ねると温かく歓迎してくださった。カイロ事情に精通していた故鈴木登さんがたしか、(それまで専門調査員といえど若手の、いわば「駆け出し」の研究者が多かったのに対し)湯川先生は初の「大学教授の専門調査員」なので大使館の中で一置かれ、大使にもとても頼りにされている、というようなことを言っていたのを記憶している。実際、私自身強い印象を受けたのは、湯川先生が決して「腰掛け」的・便宜的(一)に専門調査員をやっているの

ではなく、(近代以前のイスラームの歴史が専門のはずであるにもかかわらず)現代中東の政治・思想状況にも非常に生き生きとした関心を抱いて真剣に観察・分析をされている、ということだった。資料収集のためにやはりカイロを訪れていた飯塚正人さん、東長靖さんと共にご自宅に呼んで頂いて夕食をご馳走になり、たまたまイラン革命のことが話題になった際、湯川先生が「でも、同じことがここ(エジプト)でも起きるかもしれないよ。その時は、イラン以上に凄いいことになるかもしれない」と言っておられたのは今でも耳に残っている。当時、先生は、(おそらく鈴木登さんとの意見交換にも大きな刺激を受けて)ムスリム同胞団の動向に深い関心を抱いておられていたようである。

また、(やはり「大学の歴史の先生である専門調査員」湯川先生がいるからこそできる贅沢な企画として)日本大使館主催で、湯川先生の引率のもとに希望者がカイロを半日見学する「歴史ツアー」のような催しがあり、エジプト到着後まもない私もこれ幸いと参加させて頂いたのも貴重な思い出である。湯川先生は「これはちょうどヨーロッパでいえばロミオとジュリエットの頃の建物です。——ヴェローナなんて、当時は小さな町だったんでしょね」とか、「ああいう風にミナレットが鉛筆みたいに立ち並んでいるモスクはオスマン時代のものが多いです」といった語り口で、さりげないようについて歴史的洞察と該博な知識に裏打ちされた説明をして下さった。参